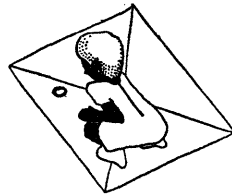


老人と子ども



津 守 房 江

秋は微妙に移り変わる。まだ夏のほてりの残っているような秋から、澄んださわやかな秋へ、そして寒さの迫ってくる冬の近い秋へと変化する。老いの日々を「人生の秋」と呼ぶ時、ここにも季節と同様の変化があることを、人々は気付いているのであろう。

祖父の家の庭の一隅にある小さな我が家に、子どもたちが次々に誕生したのは、祖父の「人生の秋」もなかばのことだった。幼い子どもと祖父とのやりとりは、穏やかで、澄んでいて、その中に何とも言えないおかしさがあった。

「ジージ、オツム テンテン」

一歳を過ぎたA子と私が、庭に出ると、祖父に出会う。A子は杏の花びらを拾って、祖父に差し出す。「ジージ（祖父のこと）ドージョ」長身の祖父は、ひざを折り、腰をかがめて「ハイ、アリカトウ」と丁寧を受け取る。一心に差し出していたA子の目の前に、祖父の毛の少い頭が近づいて来て、それに興味をひかれたA子は「ジージ オツム テンテン」と手を伸ばす。祖父「ハイ、ドージョ」と、更に頭を下げて、A子に届くようにする。何回も繰り返し、「オツム テンテン」と言って、

ピチャピチャ叩く間、祖父は長いことじっと頭を差し出している。A子が満足して次に移ると、祖父も立ち上り、やや紅潮した顔で、また散歩を続けられる。

柔らかな光の中で、ここだけゆったりと、時が流れるような光景である。祖父は幼い者の望むように自分の頭を差し出し、そのことを楽しんでゐる。「オツム テンテン」が出来たら、次はチヨチチヨチ アワワも出来るだろう、などとは考えもしない。その次を急ぐのは、若い母親の熱い想いであるが、幼い者には迷惑な時であろう。自分の存在を、その時まで楽しみ、喜んでくれる人に、幼い者は安らかに心を寄せる。

A子は精一杯手を伸ばし、かくんと頭をのけぞるようにして、祖父の頭を叩いていた。その仕草は、愛らしくもあったが、また子どもはあんなに仰ぎ見るようにするのだな、と感じたことである。働き盛りの者は、前ごみに、せかせかと動く。熱心に仰ぎ見ることはない自分は、幼い者のように高みに憧れる気持ちも少ないかと思つた。

「ジージ、焼きいも屋さんになれるよ」

祖父の古い家では、長い間薪ストーブを愛用していた。薪を

たきつけるのは、祖父の好きな仕事だった。その合間にさつまいもを何本か入れて、熱い灰で焼きいもを作る。取り出して食べる祖父のそばで、子どもたちもお相伴をするが、そのおいしそうなこと。「ジージ、焼きいも屋さんだったの？」と尋ねる。「イヤ」という答に、「ジージ、焼きいも屋さんになれるよ」という。

これは子どもの最大の賛辞なのであろう。子どもの目には、祖父は散歩しているか、聖書を読んでいるか、子どもたちの騒音の中で居眠りをしているかのいずれかであったから、ジージにこんなことが出来るなんて、という励ましをこめた言葉だと思ふ。

人の役に立つことは勿論大切なことだけれど、老いて人の世話を受けるようになった時、穏やかに、親切に受けられることは、もっと大切なことである。後年祖父にとって冬の季節が来た時、青年となったこの子どもたちは、その静かで、穏やかな姿を「何て見事なんだろう」と心から言つた。

「ジージがトランプに勝つわけ」

夏休み、冬休みには、子どもたちは、よく祖父の家に集つて、トランプやカルタをした。祖母がトランプが強くて、好き

なこともあって、同じ庭続きに住むいとこたちも来て、ゲーム

は白熱した。祖父は勝負事には興味が無いが、カルタの読み手にされたり、人数の都合で、無理に入れられたりした。祖母は、小さい子どもがビリにならないように、しまいは上手に自分が負けるように気を配っていた。しかし、祖父はそんな器用なこととは出来ない。無頓着にカードを出すので、偶然に小さい子を負けかしそうになったりする。すると祖母が、つついて一生懸命知らせようとするが、祖父には何のことか通じない。仕方なく祖母は「この札は出しちゃだめですよ、こっちなさ」と指示する。小学生になった子どもたちは、「ジージ、かわいそう」と同情する。祖母は一番の人には賞品をミカン一個、次の人はキャンデー、そしてビリの人には上等のチョコレート、というように賞品を出してくれる。つまり、ビリの人の方が、いくらかよいものが用意されているのである。こんな祖母の気働きの中で、祖父が何事につけても、その理想を生きられたことを、後になって子どもたちは分ってきた。

或る日、トランプの神経衰弱をした時、終り近くに祖父が、残りの札を全部あけて、勝ってしまった。その時子どもたちは感心して、その中の一人はこう言った。「ジージが神経衰弱に勝つわけが分った。勝とうなんて全然思わないからだ！」これ

は大きな発見だったようである。

「犬も死んだら天国に行くの？」

祖父の愛犬クリが死んだ。もし犬に知能指数というものがつけられるなら、この犬は極く低いIQだったと思う。しかし、伸びやかに庭中を遊び暮した犬は、なんとも愛すべき存在だった。朝、庭先で美しい姿でぼったりと眠るように死んでいた。

この日、祖父に幼い子どもが尋ねた。「犬も死んだら天国に行くの？」祖父は「聖書を持っておいで」といって、開いて一人で読んでいる。「ねえ、犬も天国に行くの？ 何て書いてあるの？」と重ねて言われて、やっと気付いたように、「ああ、そう」と答える。そして旧約聖書の一章を、声を出して読み出される。天地創造の記事が書かれている部分で、特に子どもの質問に関係があるわけではない。しかし子どもは神妙に聞いている。ボソボソと読む祖父と、幼い子どもと二人を、私は不思議な思いで見ている。

老人と子どもとの間にある不思議な共感と、調和とは何なのだろうか。それは、役に立つとか、気が合うとかいうようなことでは勿論ない。互にその存在を心から喜んでいることであるが、それなら老人と子どもとの間だけでなく、親しい者同志に

も同じことがいえるから、それだけでもないように思う。存在の自然な在り方が似ているからであらうかと思う。早春と晩秋とが似ているように。日の出の時と、日没の時とが似ているように。天国から来たばかりの者と、天国へ帰ろうとしているものとが似ていて、その共感なのであらうかと思う。

たしかに、どんな老人でも、身近にある時は、その枯れていない部分を見せられることがある。また、子どももヤンチャをぶつけてくる。どちらもその相手は、働き盛りの中間の世代へ向けられている。この世代の持つ忙しい雰囲気や、活力がそれらを引き出しているとも言える。しかし、老人と子どもは、互に共通の美しい、好ましい部分を引き出し合うことが出来るのだらう。

一本の樹の終焉

或る夏の日、子どもたちとおやつを食べていると、急にサラサラと音がして、家の前の樺の葉が散っている。まだ秋ではないのにと、いぶかりながら庭に出てみると、祖父の門のわきの樺を、あわただしく葉が散っている。子どもたちは、はしやいで落ち葉で遊んだが、後になって、光化学スモッグということを教えられた。暑い日に葉を落した樺は、けなげにも、もう一

度芽ぶき、もう一度葉を落した。その後、子どもたちが「すごいものが落ちてる」と呼びに来た。一メートルもの長さで、樺の樹皮がはがれ落ちていた。樺の樹皮は普段の年にも少しづつ、新しいのが出来て、古いのは、はがれ落ちる。しかしこんなに沢山、なめらかな生の木の肌を出して落ちたことは初めてである。嵐の日には、大枝がごっそり落ちて来たりもした。樺の樹に何か崩れが近づいていることは、もう疑いようもなかった。道に大枝が張り出しているので、事故でもあっては、と祖母が気を揉むが、出入りの植木屋さんは年取っていて、とてもこの大木を切れないと言う。そんな時、或る植木屋さんから樺を切るから、代りに幹を下さいという申し出があつて、それを受けることになった。チェーンや機械が持ちこまれ、もののしい様子で、大勢の見知らぬ人たちによって樺は切られ横たわった。子どもたちは、もう近寄ろうとはしなかった。毎日その下で遊び、その下を通って学校にも通った樺が枯れる日思ったことはなかったが、その日が来たのである。その後、樺には及ばないが、榎（カスネ）やくるみの実生（シノボク）が大きく枝を張ってきた。

祖父の死を迎え、幼かった子どもたちは、若木のような青年になつてきた。